

### 1.3 実用主義的アプローチと筆者の立場

失語症者は聴覚的理解、文字理解、発語、書字など言語に関連する広範囲な活動の障害を呈す。このため、これらの障害の基盤となっている構造を、失語症者間で比較し、また各症例の継時的変化を包括的に捕らえるために、SLTAなどの標準的な失語症検査が開発された。そのため、これらの検査は標準性や再現性を得るため、記号としての言語の操作能力を、他の要因をできるだけ除いた形で調べている。

一方、失語症者の理解力は、自然な場面の中で関連する文脈が与えられたときに、より良いものになることが知られている。失語症者には、日常場面に付随する文脈の手がかり、状況についての経験的な知識、身振りや表情など非言語的な情報を利用する能力が残されていることが多いからである（本多, 1993）。その最大の理由として、Pala-linguisticな処理をおこなう右半球が、正常に機能していることが挙げられよう。

失語症者は言語やシンボルの理解に困難を示すが、それらは文脈を排除されて提示されたとき、よりその困難度が増す。従って、標準的な失語症検査の成績と、実生活におけるコミュニケーション能力の相違がしばしば指摘されてきた。このことは同時に、自然なコミュニケーションにみられる文脈を取り入れたほうが、文脈を減らした伝統的な検査よりも実践的な評価ができることを示唆する（Davis & Wilcox, 1981）。

形式文法を代表とする従来 of 言語学においては、文脈をできるだけ排し、孤立した単語や、文を分析対象としてきた。これに対して、語用論の分野では、社会的、認知的影響をも反映した現実の言語使用を対象とする。つまり、文脈の中における意味が重要な関心事になっている（本多, 1993）。

1978年 Wilcox と Davis は、標準的な失語症の理解力検査では不良だった症例に、ビデオで記録した話し手と聞き手の対話場面を見せた。そして、失語症者らにその中でやり取りさせた意味を判断させ、誤りが少なかったことを報告した。その後、Davis と Wilcox (1981) は、語用論の研究にもとづく PACE (Promoting Aphasics' Communicative Effectiveness) と呼ばれる自然な対話構造にもとづくアプローチを導入した。これは、自然な会話そのものではないが、日常会話の本質的な要素を応用したものである。アプローチの主要目的は対話者間の新情報の伝達におかれ、話し手と聞き手の役割交代を積極的に行わせる。具体的には、聞き手がわからない情報を、話し手は身振り、表情、描画など自由な伝達手段を選択して、伝達を試みるものである。これ以後、言語学の「語用論」を理論的な基盤とする実用的なアプローチや評価方法が少しずつではあるが、出てくるようになった。

1980年 Holland は、日常生活上の基本的なコミュニケーション活動を、生活場面のシュミレーションを用いることで評価する検査を作成した。この Communicative Abilities in Daily Living -A Test of Functional Communication for Aphasic Adults を、綿森ら(1987)は日本人向けに改訂し、実用コミュニケーション能力検査—CADL 検査として発表した。これは実際の生活用品や言語以外の状況を積極的に利用するもので、検査項目は薬を指示に従い飲む、自販機で切符を買う、ラジオの天気予報を聞くなどがある。採点は言語的に正確か否かではなく、情報が伝達できたかどうかで判断される。例えば、「今、具合の悪いところはどこですか」という質問に対し、自分の口を指し示した場合などは正答となる。

これらの検査に対して、Skinner ら (1984) は、シュミレーション場面でのロールプレイという方法からくる限界を指摘した。また、重度な

失語症者は参加できないことなども問題とした。このように、この検査は、主に中度の失語症者が適応の対象となっており、軽度と最重度の失語症者らには適応が困難な点が含まれている。軽度失語症者の中には、標準的な失語症検査では全問正答する程度に改善しても、社会生活上、あるいは職業復帰上、コミュニケーション障害を訴える症例がいる。しかし、このような症例に対する評価は、従来の標準的な失語症検査ではもちろん、上記 CADL 検査でも取り扱ってこなかった。なかでも、文脈の要因がもっとも加わる談話の理解は、その有効性が前節のように示唆されながらも、ごく簡単な検査項目があるだけだった。

そのため、失語症者の談話の理解は、2.1 節で紹介するように、個々の研究者によって、別個に検討されてきた。また、それらの研究者の多くは、談話の理解は日常の実用的な理解力の指標になるとみなしている。しかし、それらの研究で使われた談話は、やさしい読み物を音読したものを使っている。

一方、筆者は、現実に使われているニュースや談話を用いて評価をすれば、より軽度失語症者の実用的な談話の理解が推察できると考え実験を行ってきた。

最重度の失語症である全失語症者の理解力の評価は、単語がどの程度理解できるかが主な目的となる。Schuell(1961)は、使用頻度の異なる 4 種類の単語の聴覚的な理解を調べた。その結果、単語の使用頻度が低下すると成績も低下したため、単語の使用頻度は理解に関与する重要な要因であるとした。しかし、単語の使用頻度は、個々人の経験、職業、興味などの要因によって決定される。実用主義的には、失語症者個人にとって、明確に意味があり、関連がある言語素材を見つけ出すことが重要であろう。

CADL 検査を製作した Holland (1980) は日常実際に使用されているという前提で、利用できる言語素材のリストを提示している。そのなかには、食品のラベルやビルの看板などが含まれている。綿森ら (1987) も日本版 CADL 検査の中で、実用コミュニケーション中心の治療法は日常性を原則とし、名前など個人的に意味を持つ情報を素材に使うと良いとした。

ところで、ビルの看板の多くや名前などは、固有名詞である。日常では、知人、有名人、会社名や商品名など無数の固有名詞が存在する。上記の著者たちは、固有名詞の利用をすすめているが、CADL 検査では評価の対象にしなかった。また、一般名詞と比較しての固有名詞の独自性や、全失語症者にとってどの程度処理しやすいものかという考察なども行わなかった。標準的な失語症検査でも、固有名詞は検査項目からはずされてきた。

本論は、従来の CADL 検査の適応対象外だった軽度と最重度の失語症者に対し、彼らの日常生活上にとって、それぞれ重要な談話と固有名詞の理解に関するものである。